

寧金抗沙峰(ニンチンカンサ・7,206m)登攀

石澤好文

はじめに

栃木県高体連登山部は、昭和32年に設立され、本年で37年目を迎えております。その間、創立10周年には台湾の玉山、20周年にはカナディアンロッキー、25周年にはインドヒマラヤ（CB31峰全員登頂）、そして30周年には中国の崑崙山脈（慕士山初登頂）へと4回の海外登山を実施し、すべて成功裡に終了することができました。これらの海外登山の成果は、本登山部の組織強化と指導者である顧問教師の技術・指導力の充実に大きく貢献し多大な成果をあげてきました。

高校登山部の顧問教師は、他の運動部の顧問と異なり、常に『現役』であることを宿命的に要求されております。生徒の安全を確保し、登山の心を豊かに伸ばしてやるためには、文字どおり寝食を共にするばかりでなく、優れた登山活動の手本を示し、時には危険を回避するために身をもって導いてやらなければなりません。そのためにも顧問教師はより高い技術と見識、豊富な経験をもち、『現役』としての資質を磨く機会を多く持つことが必要となります。このことが高校生の登山活動を教育的かつ健全に発展させることにつながります。今年実施されました第40回国民体育大会（福島国体）山岳競技において、少年男子が総合第3位・少年女子が総合第4位と好成績をおさめることができました。このように本県高校登山部が全国高校総体や国体の山岳競技部門で、毎年好成績をおさめているのも、日頃の顧問教師の研鑽の賜物といえます。

以上のような趣旨をふまえ、本登山部では創立35周年を記念し、中国チベットの寧金抗沙（ニンチンカンサ）峰に学術登山隊を派遣し、8月17日に一次隊4名が登頂したのにつき、二次・三次のアタックで隊員11名・シュルパ3名が未踏の西面（南西稜）より登頂することができました。また今回は、県博物館より池嶋和雄名誉総隊長（博物館長）および2名の学芸員の参加を得て、『チベットおよびネパール地域の両生・爬虫類を中心とした小動物相およびテーチス（古地中海）地域における珪質堆積物の比較検討』の学術調査を実施しました。また、1984年以来筑波大学体育科学系運動生理学教室の浅野勝己教授にお世話になり、『低圧環境シミュレーターを用いた運動生理』の研究を継続して参りました。今回は、浅野勝己教授および遠藤隊員（筑波大学大学院生）が遠征に同行し高所における運動生理の研究を実施しました。そして、高校教師という職業柄、各隊員が各自の専門教科を踏まえ、『チベットの植物の研究・自然と文化』等の調査研究を实践しました。この事は、高校生の登山ばかりでなく、今後の教育活動に大きく生かしうることを確信しております。また、前回より高体連登山部のOBに参加を呼び掛け、慕士山の遠征にはOB6名（大学生2名）が参加しました。この大学生2名は、栃木の教員になり後輩の指導に当たっております。またこのうち1名は今回の遠征にも参加

1. 登山の記録

し、精力的に登攀活動をし第一次登頂を果たすことができました。前回の成果を踏まえ、今回も高体連登山部OB 5名（大学生2名）が参加しました。この事は、登山部の生徒達にとって大きな励み・目標となることと思われれます。

1. 準備経過

1990年8月中国崑崙山脈・慕士山（ムズターグ、6,638m）の初登頂に成功し、北京への帰途次の遠征はチベットのシジャパンマに行こうと言う事、北京にて祝賀会の折り中国登山協会に仮ブッキングをしてくる。この遠征のトレーニングのため、1991年8月8日～14日に、韓国の仁寿峰（インスポン）・雪岳山（ソラクサン）で岩登りの充実した研修を実施した。また1992年7月24日～8月24日には、次回の目標をチベットの7,000mの未踏峰（未踏稜）に決め、7,000mの高峰登山経験者を一人でも多く養成するために、パミール国際キャンプに渡邊隊長以下石澤・後藤が参加し、コルジュネフスカヤ峰（7,105m）に3名全員が登頂することができた。予定していたコムニズム峰の登頂は悪天に阻まれ成し遂げられませんでした。次の目標に向けて自信をつけた良いトレーニングであった。その後1993年の全国高校総体の準備に追われ一時中断したが、1994年7月10日の海外登山研究会で目標の山を中国チベットの寧金抗沙（ニンチンカンサ）峰に決定し、チベット登山協会より10月に登山許可を取得した。さらに中国登山協会と義定書を交わし、12月3日実行委員会を発足させ諸準備に当たった。この計画を推進してきた渡邊氏がJACのマカルー隊に参加するためこの遠征に参加できなくなったのは痛手であったが、前回の遠征経験者が多く何とか準備をすすめることができた。当初カトマンズから隊荷を入れる予定であったがマカルー隊からの助言もあり、リスクの少ない北京経由で拉薩（ラサ）に送ることに変更したため、徹夜で梱包作業し4月20日約1.2トンの隊荷を北京に向け送ることができた。

寧金抗沙（ニンチンカンサ）峰は、中国チベット登山隊が1986年4月28日に初登頂し、自衛隊山岳連盟が1992年5月4日第2登をした『百衣の霊峰』と呼ばれている山である。これらの2回登山はカローラをBCに南面から登頂されている。拉薩（ラサ）から車で6時間の距離であり、中尼公路がすぐ近くを通り、キャラバンなしでBCに入ることができ、我々のように登山期間が限定されている登山隊には非常に便利な山であった。

国内の準備については、毎月2～3回の準備会を開き、月1回程度のトレーニング山行を実施した。トレーニング山行は、剣岳・穂高岳・富士山・松木沢等で、各シーズン毎に目的を設定して実施した。この山行・準備会を通してメンバーの体力・技術のレベルアップとチームワーク作りができた。また、文部省登山研修所のご理解とご協力を得、施設の借用で便宜を図っていただいた。高所登山に関する問題については、筑波大学の浅野勝己教授のご指導をいただき、12回に亘り低圧環境シュミレーターを用いて、高所における運動生理の研究を行い、現地での測定データー、登山終了後の6回に亘る脱順化のデーターをとり、現在この研究についてまとめをお願いしているところです。この研究成

1. 登山の記録

果及び学術研究につきましては、正式報告書（1996年3月発刊予定）の中で詳細に報告する予定であります。

2. BCまで

先発隊3名は7月16日に日本を発ち、バンコクを経由してカトマンズ入りする。ここでシェルパの雇用、アイスハーケン・EPIガス、食料等の買い出しを行う。当初、現地購入の食料・装備は全てカトマンズで購入する予定であったが、その大半を拉薩（ラサ）で購入することにしたため、先発隊の仕事も少なく楽であった。出発前の準備の忙しさから解放され本隊到着まで快適な生活を送ることができ体調も万全にすることができた。

一方、池嶋名誉総隊長以下6名（猿山・石塚登山隊員2名）は、無線機・ガモフバック・撮影器材等大量の手荷物を持ち、7月21日に日本を発つ。北京・成都を経由して7月23日拉薩（ラサ）に到着し、野菜等の食料、灯油・ガソリン等の燃料、装備の調達をする。チベット登山協会の倉庫で、日本から送った隊荷の引き出し作業の後、7月27日江孜（ギャンツェ）にて、本隊と合流すべくトラック1台とジープ2台で出発する。

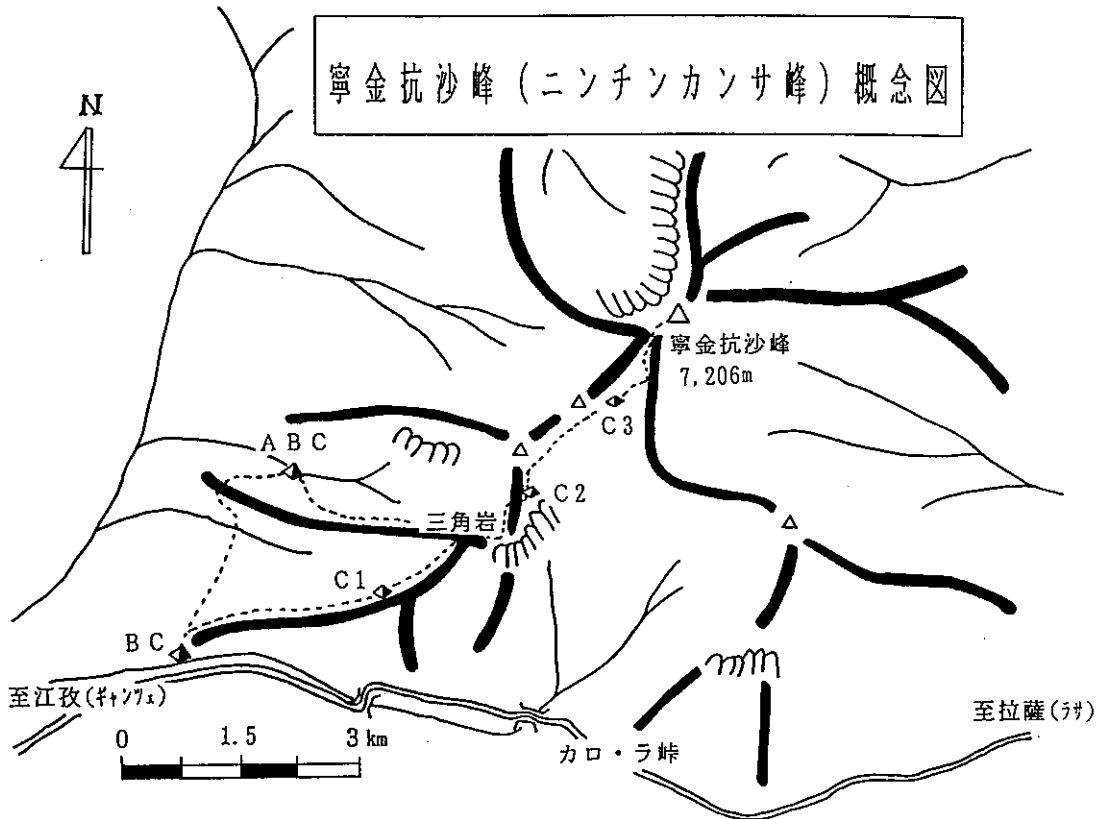
浅野名誉顧問以下16名の本隊は、7月22日、日本を発ち香港経由でカトマンズに到着。先発隊およびシェルパの出迎えを受ける。翌7月23日早朝、マイクロバスとトラックに分乗し中国とネパールの国境コダリに向けて出発する。高度をかせぐに従って、道が悪くなり途中何度か立往生するが無事に通過しコダリに到着。懸念された出国・通関手続きもトランス・ヒマラヤ・ツアーのエージェントおよびシェルパの活躍で難無くクリアできた。友誼橋を歩いて渡り、中国登山協会の連絡官・通訳の出迎えを受け、この日は樟木（ザンムー）迎賓館に投宿する。

7月24日パスポート検査に手間取りランクル1台、マイクロバス1台に分乗して出発したのは11時30分。しかし、すぐ土砂崩れによる道路工事のため1時間半ほど足止めをくう。頭上からの発破に伴い石のかけらが飛んできたのには驚いた。ようやく再出発したのも束の間、谷底に昨夜落ちたばかりのトラックの無残な姿を見て、肝を冷やす。聶拉木（ニェラム）（3,700m）に到着し、昼食後順化のためホテル裏の3,900mの丘に登る。この夜から隊員の1名が高度障害になり回復が見込めないとのドクターの判断で、ドクター・通訳・付き添いの隊員と共に樟木（ザンムー）に戻る。

7月25日、標高5,000mのラルン・ラを越え、シジャパンマ・チョモランマの眺めに感動しながら、定日（シガール）（4,280m）に移動する。翌26日は、定日（シガール）に滞在しラマ教寺院の裏山で高度順化のトレーニングをする。

7月27日、本日の行程は長く未明の7時に出発する。チベット第2の都市日喀則（シガツェ）で昼食をとり、江孜（ギャンツェ）に夕刻到着する。ここで名誉隊6名と合流する。うまく合流できるかどうか心配していたが、登山隊のメンバーが元気な姿で合流でき、まずは一安心する。7月28日、江孜（ギャンツェ）のホテルで出発式をした後、名誉隊と別れBCに向けて出発する。カロ・ラにBCを構

1. 登山の記録



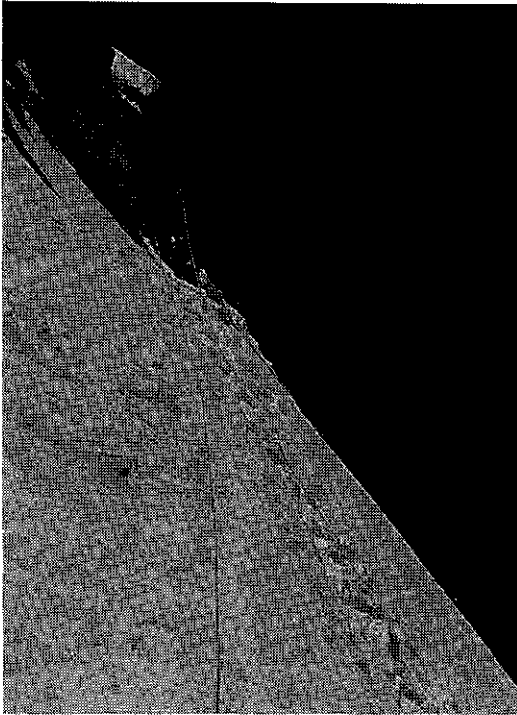
寧金抗沙峰 (ニンチンカンサ峰) 概念図

えた福岡大・北京大合同隊を表敬訪問した後、道路のすぐわきの4,690mの草原にを設営する。夕方BC開きを行い神島副隊長の読経のもと安全祈願をする。

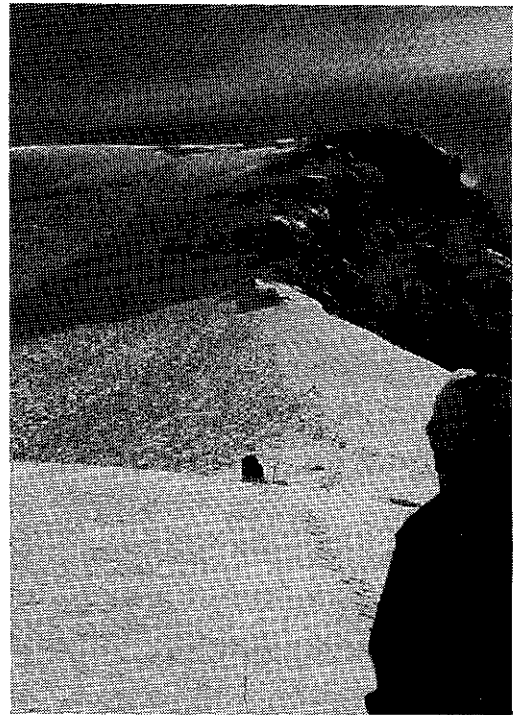
3. 登山活動

7月29日、いよいよ待望の登山活動の開始である。ルート偵察でC1予定地(5,800m)まで登り南西稜にルートを決めた。C1をもう少し下に設営したかったが、肝心の水を作る雪がないためこの高度になってしまった。C1までの距離が長く、荷上げ等を考えABC出すことにする。7月30日ヤクを雇い入れABC(4,970m)を西面のアイスフォール帯下の広い快適な大地に建設する。

7月31日は雨のため休養日とし、8月1日よりルート工作及び荷上げを開始する。翌2日、荷上げも順調に進み雪線とのコンタクトラインの尾根上にC1(5,750m)を建設した。8月3日、三角岩と呼んでいた6,000m付近の雪壁(ルートの核心部)に14ピッチロープを固定し突破することができた。雪壁を越えると雪稜になり、ここに11ピッチロープを固定しC2予定地までルートを伸ばすことができた。8月8日、南側がすっぱりと切れ落ちたなだらかな小さなピーク上にC2(6,400m)を建設した。この前日、北京大の学生が骨折する事故があり、手当てに行った隊員が帰路、自転車で転倒する



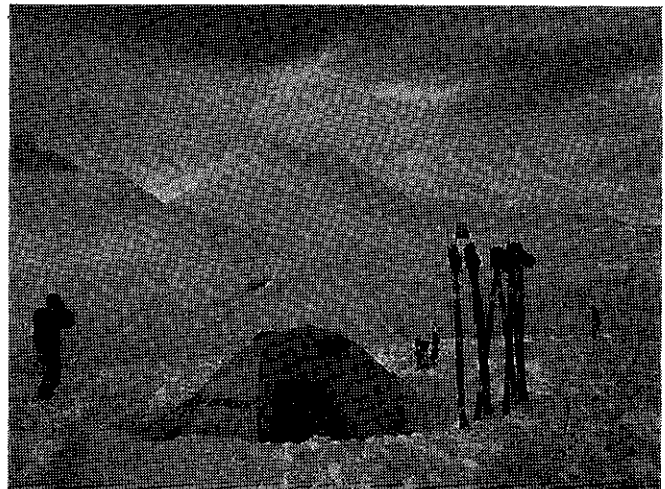
三角岩付近雪壁の登攀



C2へのルート工作

する事故があり、拉薩（ラサ）に行き病院で手当てを受ける。さいわい怪我も軽く10日にはBCに元気に戻ってきた。8月11日、C2からはクレバスの多い雪原をトラバース気味にルートを取り、頂上基部の雪原にC3（6,600m）を建設することができた。これでアタック態勢が整い、12日には全員BCに集結し3次に亘るアタックメンバーの発表がなされた。

8月14日、第1次アタック隊4名（石澤、神島、菅又、ダワ・チリ）が皆の見送りを受けて出発する。この日の夕方から雷を伴った雪が降りはじめ翌朝まで降雪があった。C1で50cm、BCで30cmの積雪になり15日は各キャンプとも停滞とする。午後からは天気も回復する。16日は1日遅れで第2次アタック隊5名（後藤、稲葉、石塚、深谷、チェワ・ニ

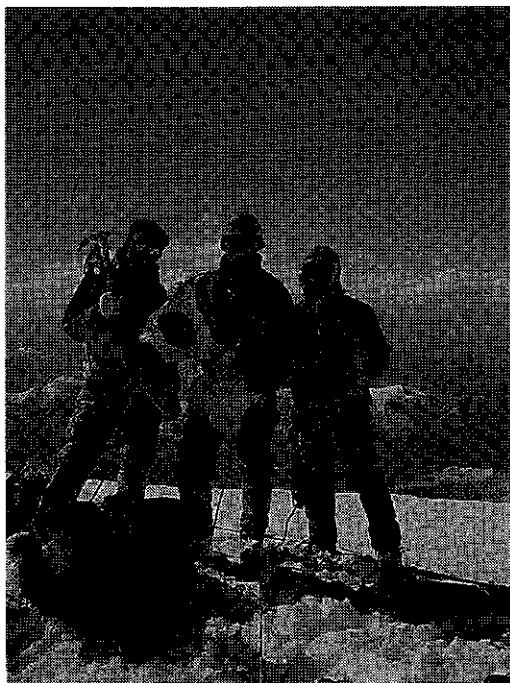


C2より頂上を望む

1. 登山の記録

ワ)がBCを出発する。第1次隊はC2に入る。

8月17日、快晴で絶好の登山日和である。本日の予定は、C3までであったが、12時前にC3に到着し、明日も好天の保障は無いことと、何としても第1次アタックだけは成功させなければとの判断から本日のアタックに踏み切る。はるか頂上へと続く稜線には、福岡大・北京大隊が登っているのが見える。果たして今日中に頂上へ届くかとの懸念を抱きながらも一步一步足をを進める。近いと思われた頂上も意外に遠く、時間がかかる。途中で下山中の福岡大・北京大のメンバーと会い勇気づけられる。やっとの思いで17時38分頂上に立つことができた。頂上は思ったより広く、回りは雲一つ無く360°遮るものもなく素晴らしい眺めだった。1時間程写真撮影や交信で費やした後下山する。ロングランでかなり疲労がたまり、足取



第1次登頂隊（頂上にて）

りも重くC3に到着したのは20時30分であった。第2次隊はC2入り、第3次隊5名（滝田、川崎、猿山、小口、ミングマ・ヌル）は、BCを出発しC1入りする。C3より第2次隊が8月19日登頂したのに続いて、翌20日第3次隊も天候が悪化し視界の悪い中登頂に成功したが、隊員の体調が悪くC2まで戻れずC3泊となってしまった。8月21日隊3次アタック隊の1名が高度障害になり心配したが、第2次隊及び第1次隊のメンバーのサポートを受けて、C3、C2、C1を撤収して20時50分全員無事にBCに集結することができた。本当に長い一日であった。

8月22日、登頂祝いをBCで盛大に実施し、登頂成功と事故無く登山を終了できた安堵感にひたることができた。23日より25日まで隊荷の整理をする隊員と、学術研究のため日喀則（シガツェ）に行く隊員とに分かれ、各自作業や研究に当たった。8月25日BC閉じをし、長いようでも短かった登山が終了した。

8月26日BCより拉薩（ラサ）に移動しチベット登山協会の倉庫にテント等の装備をデポし8月31日予定通り全員無事帰国することができた。

おわりに

今回の遠征で我々高体連登山部のチームも11名の7,000m経験者を出すことができた。この経験を生かし、次の新たな目標、より高い頂きを目指しての次の計画が動き始めています。今回は、隊員の中に7,000m経験者が少なく高所順化の面そしてモンスーン期ということもあり天候の面で不安を抱え

1. 登山の記録

た登山であったが、一人一人の隊員が精一杯頑張った結果が11名登頂そして学術面での成果につながったものと思っています。この成功の陰には多くの人々のご支援、ご援助があったことは言うまでもありません。お陰様で非力ながらも、チベットの地で先輩の築いてくれた『安全登山』を実践し、次の遠征に繋ぐ登山をすることができました。

この経験を全国高校総体や国体山岳競技等の競技登山で活躍した選手、高校山岳部で活動した生徒達に卒業後も登山活動が続けさせて行くためにも、身近な存在である我々指導者が大きな夢を持ち登山活動を実践している姿を見せることが、若者の登山離れが叫ばれている昨今有効な手立ての一つであろうと思われます。今後とも良いメンバーを得て高校生に夢を与えることのできるような登山を実践していきたいと思っております。

登山隊概要

1. 登山隊の名称 栃木県高体連登山部中国チベット学術登山隊1995
2. 主 催 栃木県高等学校体育連盟登山部
3. 後 援 下野新聞社・栃木県体育協会・栃木県山岳連盟
4. 目 的
 - 1) 登山；中国チベット自治区寧金抗沙峰（ニンチンカンサ峰・7,206m）南西稜（未踏）からの初登攀。
 - 2) 学術調査；チベット自治区の自然と文化の調査研究。
 - ① チベット高原における砂漠化とその人為的影響の調査研究。
 - ② チベット及びネパール地域の両生・爬虫類を中心とした小動物相調査及びテーチス（古地中海）地域における珪質堆積物の比較検討。
 - 3) 運動生理学の研究；筑波大学との高所における運動生理学の合同研究。

5. 隊 の 構 成 名誉総隊長以下25名

役 職	氏 名	勤 務 先
名誉総隊長	池嶋 和雄	栃木県立博物館
名誉顧問	浅野 勝己	筑波大学体育科学系運動生理学教室
名誉隊長	蓮實 淳夫	矢板東高校
秘 書	桑野 正光	塩谷高校
秘 書	後藤 公彦	自治医科大学法医学人類遺伝学教室
顧 問	野村 平八	白鷗大学足利高校
顧 問	佐藤 清衛	鹿沼農業高校
隊 長	石澤 好文	茂木高校
副 隊 長	神島 仁誓	大田原高校
登攀隊長	後藤 尚	那須工業高校

1. 登山の記録

役職	氏名	勤務先
隊員	増淵 仁一	作新学院高等部
隊員	滝田 道明	真岡北陵高校
隊員	荒川 竜一	栃木県立博物館
隊員	川崎 真澄	佐野高校
隊員	富永 孝昭	宇都宮中央女子高校
隊員	猿山 浩	小山西高校
隊員	稲葉 昌弘	大田原女子高校
隊員	林 光武	栃木県立博物館
隊員	小口 貴文	矢板中央高校
隊員	遠藤 洋志	筑波大学大学院
隊員	菅又 久男	鹿沼商工高校
隊員	林 祐寿	栃木県民福祉協会
隊員	石塚 学	大正大学学生（真岡高校OB）
隊員	深谷 篤志	東京農業大学学生（大田原高校OB）
医師	松島 一雄	群馬県大和町立ゆきぐに大和総合病院
クライミング・シェルパ	MINGMA NURU SHERPA	
クライミング・シェルパ	CHHEWANG NIMA SHERPA	
クライミング・シェルパ	DAWA CHHIRI SHERPA	
コック	ANG KAMI SHERPA	
連絡官	羅 申	中国登山協会
通訳	趙 玲 玲	中国登山協会

6. 期間 1995年（平成7年）7月22日（先発隊7月16日・名誉隊7月21日）
～8月31日（名誉隊8月1日）

7. 日程

（本 隊）

- 7/22 成田→香港→カトマンズ 先発隊と合流
- ／23 カトマンズ→コダリ→樟木（ザンムー）
- ／24 樟木（ザンムー）→聶拉木（ニェラム）
- ／25 聶拉木（ニェラム）→定日（シガール）
- ／26 定日（シガール）にて高所順応
- ／27 定日（シガール）→江孜（ギャンツェ）

1. 登山の記録

名誉隊と合流

- 7/28 江孜（ギャンツェ）→BC BC開き
- /29 登山活動開始 ABC（4,920m）建設
- 8/2 C1（5,750m）建設完了
- /8 C2（6,400m）建設完了
- /11 C3（6,600m）建設完了
- /14 第1次アタック隊BC出発
- /15 雪のため各キャンプとも停滞
- /16 第2次アタック隊BC出発
- /17 第1次アタック隊4名登頂，第3次アタック隊BC出発
- /19 第2次アタック隊5名登頂
- /20 第3次アタック隊5名登頂
- /21 C1，C2，C3撤収・隊荷整理
- /25 BC閉じ
- /26 BC→拉薩（ラサ）
- /27 拉薩（ラサ）滞在
- /28 拉薩（ラサ）→成都
- /29 成都→北京
- /30 北京滞在
- /31 北京→成田

（先発隊）

- 7/16 成田→バンコク
- /17 バンコク→カトマンズ
- /18 カトマンズにて本隊受入れ準備

（名誉隊）

- 7/21 成田→北京
- /22 北京→成都
- /23 成都→拉薩（ラサ）
- /24 拉薩（ラサ）にて食料・装備の調達
- /27 拉薩（ラサ）→江孜（ギャンツェ）
- /28 江孜（ギャンツェ）→BC→拉薩（ラサ）
- /29 拉薩（ラサ）→カトマンズ

1. 登山の記録

7/30 カトマンズ滞在

 /31 カトマンズ→バンコク

8/1 バンコク→成田

(栃木県高体連登山部中国チベット学術登山隊登山隊長)